

侵入帰化植物による植物多様性に対する遺伝子汚染の リスク評価のための基礎的研究

(研究期間：平成 9 年～13 年)

任期付研究員：芝池 博幸 (独立行政法人農業環境技術研究所)

総 評 (一定の成果が得られた研究であった)

本研究は、DNA の塩基配列の違いに基づく種特異的分子マーカーを開発し、侵入・帰化植物の遺伝的特性の評価や交雑個体の検出を行い、侵入・帰化植物と在来の近縁種との間で発生する遺伝子汚染の実態を明らかにするとともに、生理生態的特性の解析から侵入・帰化植物の定着・分散の機構を解明し、遺伝子汚染のリスク評価のための基礎的知見を得ることを目的とするものである。

本研究においては、我が国における侵入・帰化植物による遺伝子汚染について、農業生産系の主要構成種であるタンポポ属植物を材料とした全国規模の調査が行われ、遺伝子汚染の発生から拡散に至るまでの過程を解析し、雑種個体の拡散様式の解明に必要な多くのデータを得るなど、一定の成果が得られており、また、研究内容や実験手法についても適切であったと考えられる。

なお、着実に研究が進められているものの、目標としている侵入・帰化植物の防除等のための指針作成まで到達しているとは判断できず、また、情報発信、特に論文発表数が少ないなどの面も見受けられ、今後は、成果の効果的な活用方を考察しつつ、本研究の更なる発展が期待される。

他方、任期付研究員の活用効果については、上記の研究成果に加えて、同研究所における任期制の導入促進につながり、平成 14 年度には任期付研究員 3 名の採用に結びつくなど、活用効果は十分であったものと考えられる。また、研究所内外で本研究に対する支援協力体制を整備するとともに、植物材料を育成する温室や網室、機器等の重点的利用を可能にするなど、研究所の任期付研究員に対する支援も十分に行われている。

以上により、本研究は、総合的に一定の成果が得られた研究であったと評価できる。

< 総合評価：b >

評価結果

総合	1.目標達成度	2.目標設定	3.研究成果			4.任期制	
			1.科学価値	2.科学的波及効果	3.情報発信	1.活用効果	2.機関支援
b	b	b	b	b	b	a	a